羅馬は大なる理由があつて、他に對して有害な、或は反抗的、非人道的なものだけを切り棄てて、その古い宗教を存立させてゐた。羅馬はすべてのものの上に、一種の官憲的塗料を塗沫して、それがすべてをして相互に集合せしめ、どうかかうか一緒に融合させてゐた。不幸にして、起源の甚しく異つてゐる古くからの宗教が、一個の契合點を有つてゐて、それは、卽ち一個の神學的の敎育、應用道德、敎化的說敎、民衆のために眞に效果のある布敎事業に到達することを同樣に不可能ならしめるのであつた。異敎の殿堂は、その隆盛時代に於て、猶太會堂や基督敎の會堂の意義とは全く異つてゐた。つまり、困窮せる者が隱れ場を求めて行く寄りどころ、救護所、旅舍、學校、共同家屋といふやうなものでは無かつた。それは冷めたい房であつて、其處には殆ど人が入らず、また何物をも學ぶことの無い場所であつた。羅馬の宗敎は、恐らく、まだ人の實行してゐたものの中で、最も惡く無いものであつた。心と體との淸淨が、其處では宗敎の構成要素と考へられてゐた。その莊重、謹嚴、嚴肅なことによつて、その宗敎は、わが謝肉祭に類似せる若干の狂言を別にすれば、狂的東洋崇拜者により密かに輸入された、奇怪にして笑草になるやうな儀式より優れた位のものであつた。羅馬の貴族が、宗敎、卽ち彼等自身の祭儀を、迷信、卽ち外國の祭儀より異つたものとしようと謀つた外見は、われらから見れば矢張餘程幼稚なものである。すべての異敎信仰は本來迷信的のものであつた。今日奇蹟のある御堂の賽錢箱に銅貨一個を投入し、自己の牛馬のために某々の聖者の加護を祈つたり、或る病氣には或種の水を飲む百姓は、その事だけで異敎徒である。殆どすべてのわれらの迷信は、基督敎以前の宗敎の名殘であり、それを基督敎が全くは根絶し得なかつたところのものである。若し、今日異敎の繪像を發見したい時には、それを求むべき所は、廢滅せる或る村落に於てか、最も邊鄙な田舍の奧に於てである。

監視する者としては、唯、明滅する民間の傳統と、堂守しか無いのでは、異敎信仰が諂諛追從に墮落しない譯には往かなかつた。控目ではあつたが、アウグスッスも、生前から地方に於て拜まれることを承諾した。チベリウスは亞細亞の諸市が、自分の目前で、自己

のために殿堂を建てゝる名譽を相爭つてゐる、その醜い競爭を審くのを共儘に放任してゐた。カリグラの法外な冒瀆も何等の反動を生じなかつた。猶太教以外には、こんな狂態に抵抗する唯一人の司祭も無かつた。大部分は自然力の原始的禮拜から拔け出て、諸種の混合と諸民族の想像とによつて、幾度も改造せられた異教の信仰は、それらの過去により制限せられてゐた。人々はその中に曾て無かつたもの、理神論や教訓などを、それから取り出すことはできなかつた。教會の教父達が、家庭の父としてのサテユウルヌの失敗や、良人としてのジュピテルの失敗を指摘する時、われらは微笑させられるのである。しかしながら、ジュピテル(卽ち空氣(アトモスフエエル))を、命令し、防禦し、報酬を與へ、罰を課する精神的の神に祀り上げるのは、たしかに更に一層滑稽なことである。教義の解釋を所有したく望んでゐた世界に於て、地中海をフェニシヤ人が最初に航海した頃の、古い社會的要求から出た、しかし、時と倶に宗教の本質と漸次に人々が考察したものに對して、一個の侮辱となつた。ヴェヌスのそれのやうな信仰を、人々が何とすることができやう。

事實、四方から、神の規定を道德の基本とする、一神論的宗教の要求が、力强くあらはれてゐた、かくして、單純な兒戲や、魔法使の看板くらゐに成り下つた自然宗教が、道德的哲學的宗教を要求する人類の社會には、最早應ずることができないのである。佛教、ゾロアストル教は、印度及び波斯に於て、その要求に應じたのである。オルフオイス教や神秘が、永續的には成功しなかつたけれども、希臘の世界に於て同じ事を企てたのである。われらの今達してゐる時代に於て、一種嚴かな全員一致と必至的偉力をもつて、この問題が世界全體のために提出せられたのである。

尤も希臘はこの點に於て例外であつた。ヘレニスムは、帝國內の他の諸宗教よりも遙かに銷磨してゐなかつたのである。プルタルクは彼の小さなベオクヤの都市に於て、ヘレニスムをもつて、安心し、幸福に、小兒の如く滿足し、最も靜かな宗教意識をもつて生活してゐた。彼に於ては、危機、焦燥、不安、緊急革命の一痕の跡も無かつた。しかしながら、こんな無邪氣な天空快濶な心持でゐられるのは、唯希臘精神があるばかりであつた。常に

自己に滿足し、自己の過去と、あらゆる神聖な場所を所有してゐたところの、その光彩陸離たる神話とに得意であつたギリシヤは、其餘の世界を惱ましてゐた内的煩悶には沒交渉であつた。獨りギリシヤが基督教を招かなかつたのである。ギリシヤだけは、それ無しに濟まさうと欲したのである。ギリシヤだけはそれ以上のことをするものであると主張してゐた。それは永久のその若々しさに基くものであり、その愛國心と、その快活とに基因するものであり、それが常に眞のヘレナの特色であつたのであり、今日でも、われらを惱ます深刻な苦悶に對して、希臘人が沒交渉であるかの觀ある所以である。かやうに希臘教は何れも試みることのできない再生を企圖することのできる程度にあつた。基督紀元の二、羅馬帝國内の宗教中他の三、四世紀に於て、希臘宗教は神話と哲學との一種の融合によつて、組織的宗教に建設されることになり、さうして、その通力ある哲學者、天啓者に崇め祀られたその聖人、ピタゴラス及びアポロニウスの傳説などをもつて、基督教に對して競爭をすることになり、それは依然無力であるにはあつたが、イエスの宗教がその途上に於て遭つたものの中で、矢張最も危險な障礙であつたのである。

　この企圖は、まだケエザル時代には生れなかつた。哲學と異教との間に、一種の同盟を試みた最初の哲學者、ツロのユウフラテス、チヤナのアポロニウス及びプルタルクは、この世紀の末の者である。ツロのユウフラテスはわれらに十分知られてゐない。アポロニウスはその傳説が非常に眞の傳記の網の目を蔽うてゐて、彼を聖人の中に算ふべきか、宗教上の始祖に算ふべきか、香具師の中に算ふべきかを知らぬ程である。プルタルクはといへば、それは一個の思想家革新家といふ方では無く、哲學を小心なものとし、宗教を半ば道理あるものとして、すべての人を一致させようと望んだ穩健家であつた。彼の裡にはポルフイルやジユリアンのやうなところは毫も無い。ストア學派の譬喩的宇宙解釋の試みは、甚だ微力なものであつた。優美な象徴の下に、靈の不滅を教へるバッキュスのそれのやうなミステエルは、某々の國に限られ、廣い勢力は無かつた。公的宗教に對して疑惑を挾むことは、知識階級に一般のことであつた。國教を最も支持する顏を裝つてゐる政治家は、

甚だ面白い言葉でそれを嘲笑してゐた。宗教的童話は民衆にとつてのみ結構なもので、それは民衆の爲に維持さるべきものであるといふ不道德な言說を公然人々が口にしてゐた。それは甚だ無用な用意である。何となれば、民間信仰はそれ自身根本的に動搖してゐたからである。

尤もチベリウスの卽位以後、宗教的反動が著しくなつてゐた。世界はケェザル、アウグスツス時代の公然の無信仰に恐怖を抱いてゐたやうに見える。人々はジュリアンの不運な企圖の前驅をしてゐた。すべての迷信が國家存立の理由から復興される形勢であつた。ヴアレリス・マクシムスは下劣作家の第一例であつて、困つてゐる神學者の補助となり、宗教のために汚れた或は金次第の筆を使つた。しかしながら、この反動を最も利用したのは外國の宗教であつた。ギリシャ羅馬の宗教上の眞面目な反動は、第二世紀になつて始めて生ずることになる。今、宗教的不安に襲はれてゐる階級は、東方から來た宗教を顧みてゐる。イジスとセラピスとは今迄に無い多くの好感に遭遇した。あらゆる種類の詐欺者、通力者、魔術師等は、この要求を利用し、さうして、國教微力の國に於て、常に多くの時代に起るやうに、四方に簇出した。チヤナのアポロニウス、アレキサンデル・ダボノチカ、ペレグリヌス、ジトンのシモンなどの眞か僞かの類型を想起すべきである。これらの誤謬其物も、またそれらの空想も、勞作せる地の祈禱の如きもの、自己の掟を求めて、痙攣的努力の裡に、忘却に運命づけられた怪奇な創造物に時として達することのある、かの獲るところの乏しい世界の試みの如きものであつた。

要するに、第一世紀の中葉は、古代史中の最も良くない時代である。この頃の希臘羅馬の社會は、以前のものに比すれば廢頽裡にあり、後れて來るものに比すれば非常に退步せる狀態にあつた。しかしながら、危機の大なることは、秘密な奇怪な或るものの形成されることを暴露してゐた。生活はその原動力を失つた觀があつた。自殺は增加した。曾て何れの世紀もかやうに善と惡との間の爭鬪を示したことは無かつた。惡とは、取りも直さず、殘虐狂暴な人間の掌中に世界を渡す怖るべき專制主義であつた。それは東方の惡德を羅馬

に輸入したことから生じた風俗の墮落であつた。それは善良なる宗教と眞摯な公教育の缺乏であつた。善とは、取りも直さず、一方に於て、暴君に對し勇敢な攻撃をなし、怪物に對して不信を表明し、半世紀間に三四度（ネロ、ヴェスパジアヌス、ドミチアヌスの時代に）も追放を受けた哲學であり、他方に於ては、民衆の德の努力であつた。即ち宗教的によりよき狀態への正當な憧憬であり、協會組織や一神論的禮拜への傾向であり、貧民の復位であり、それらは主として猶太教や基督教の裝ひの下に生じたのであつた。この二つの大なる抗議は一致するどころでは無かつた。哲學の黨と基督教黨とは互に識らなかつた。兩者ともその努力の共通性を殆ど意識してゐなかつた。それ故哲學黨はネルヴアの卽位によつて權力に達しながら、基督教に好感を表するどころでは無かつた。實際のところ、基督教徒の計畫は非常に過激極端であつた。羅馬帝國の主たるストア學者がそれを改良することによつて、人類史中の最も美しい百餘年間主席を占めてゐた。コンスタンチヌス以後、羅馬帝國の主となる基督教徒は、全くそれを滅してしまつた。甲の英雄的精神は乙のそれを忘れしむべきでは無い。異教的の德に對して、非常に不公平な基督教は、自己と共同の敵を攻撃した者の價値を安く見積ることを任務とした。第一世紀に於ける哲學の抵抗の中には、基督教のそれの中にあるものと劣らない多くの偉大さがあつた。しかしながら、双方の酬いの、何といふ不等なことであつたらう。足をもつて偶像を顚覆させた殉教者には傳說がある。ネロの書物は決してクリシッポスのそれと匹敵する價値のもので無いといふことを、ネロの前で公言したアンネウス・コルヌツス、ヴェスパジアヌスに面と向つて、『汝は殺さるべく、予は死すべし』と言つたヘルヴィヂウス・プリスクス、怒れるネロに對して、『汝は死をもつて予を脅かす、しかれども、自然こそ汝を脅かせり』と答へたシニックのデメトリウス等は、何故萬人の愛し敬する名高い英雄の中にその畫像を有つてゐないのであらうか。他の助力を斥け、德のみが勇敢であり、高踏であり、忍從である權利を有するものであると主張することが、一々の德の學派に對して許されてゐるくらゐに、果して惡德卑劣を敵として十分多くの力を人類が左右してゐるか何うか。

第十八章

此時代の宗教法制

羅馬帝國は、第一世紀に於ては、東方から來た宗教上の革新に對して、敵對の態度を示しながら、未だ一定不斷の態度をもつて、それと抗爭しなかつた。國教の原則はかなり軟弱に支持されてゐた。共和制時代には、幾度も外國の祭式、殊にサバジウス、イジス、セラピスのそれを追放した。それは甚だ無用のことであつた。民衆は抵抗のできない誘惑によつてかの如く、それらの宗教に誘はれた。羅馬暦の五三五年に、イジス及びセラピスの殿堂破壞を命令した時、一人もその任に當らうとする者を見出さなかつた。そこで、執政官が自身で、餘儀なくその戸に斧を打ち當て破壞しなければならなかつた。拉丁の宗教では、最早群民に十分で無かつたのである。シイザアがイジスとセラピスの禮拜を復興したのは、民衆の本能に諂びんが爲めであつたと、人の想像するのは、理由の無いことでは無かつた。

その特色たる深遠自由な直觀をもつて、この偉人シイザアは、信仰の完全な自由に對して好意を表してゐた。アウグスツスは、一段民族宗教の方に執着してゐた。彼は東洋諸宗教に對して反感をいだいてゐた。彼は伊太利に於ける埃及の宗教儀式の傳播することを禁じたくらゐであつた。しかしながら、各の宗教、殊に猶太教が、それぞれ獨立であることを欲した。彼は猶太人の信仰を傷けるやうなことは、すべて猶太人のために無からしめた。殊に安息日にすべての俗的行爲を無いことにした。彼の周圍の若干の人々はあまり、寛容の態度を示さず、好んで彼を拉丁宗教のために、宗教的迫害者たらしめようとしたくらゐであつた。彼がこれらの忌まはしい忠告に讓步したとは見えない。この點に關し誇張の疑ひあるヨゼフスは、アウグスツスがエルサレムの殿堂に聖器を奉納したとさへ言はうとし

てゐる。

明瞭に國教の原則を立て、猶太敎及び東方からの宣傳に對して、眞面目な警戒をした最初の人はチベリウスであつた。この皇帝が『大司敎』であり、羅馬舊來の宗教を保護することによつて、自己の職務中の一義務を果したつもりであつたことは記憶すべきである。カリグラはチベリウスの勅令を取消した。しかしながら、彼の狂暴は何等繼續するものを遺さなかつた。クロヂウスはアウグスツスの政策を模倣したやうである。彼は羅馬に於て、拉丁の宗教を强固にし、外國の諸宗教が成した進歩を憂へる態度に出で、猶太敎徒に對しては峻嚴な方法を講じ、熱心に協會制度を訴追した。之に反して、猶太に於ては、彼も土着人に對して好意を表明した。これらの二世の間に、羅馬に於てアグリッパ達の受けたよき待遇は、その同宗者に對して、羅馬の警察が安寧秩序の所置として要求した場合以外には、有力な保護を確保せしめることになつた。

ネロは何うかといふに、彼はあまり宗教の事には關係しなかつた。基督敎徒に對する彼の暴擧は、兇暴行爲であつて、立法的所置では無かつた。當時の社會に於て、人の指摘する迫害の例は、官憲よりといふよりは、寧ろ家族の權威から發したものである。尙かくの如き事實は、舊來の傳統を保存してゐた羅馬の貴族の家に於てのみ行はれたことであつた。地方は、他の地方の宗教を侮辱しないといふ條件だけで、完全に其地の宗教を守ることが自由であつた。羅馬にあつても、地方人は騷擾を起しさへしなければ、同一權利を有つてゐた。羅馬帝國が第一世紀に戰爭を仕向けた二宗教、ドルイド敎と猶太敎だけは、民族的に防禦した要砦であつた。猶太敎信奉は、民法の蔑視と、國家の繁榮に對する無關心とを含むものと、すべての人々が信じてゐた。猶太教が單に個人の宗教たらむと欲した際には、人はそれを迫害しなかつた。セラピスの宗教に對する壓迫は、恐らくそれが示してゐた一神祕的性質から來たものであり、且つそれを旣に猶太教及び基督敎と混同させてゐた性質から來たものであらう。

だから、使徒時代には、一定の如何なる法律も、一神論的宗教の信奉を禁じてゐたので

は無かつた。これらの宗教は、シリヤ出生の皇帝の即位するまで、常に監視されてゐた。しかしながら、他に對して敵對するものとして、また不寛容のものとして、また國家の否定を含むものとして、帝國が組織的にこれらの宗教を迫害することになるのを見るのは、實にトラヤヌス帝以後のことに過ぎない。畢竟、羅馬帝國が、宗教の事に關して戰を宣した唯一の事柄は、取りも直さず、神敎政治の事である。羅馬帝國の原則は俗的國家のそれであつた。如何なる程度に於ても、宗教が私法上の、或は政治上の結果を有つことを帝國は許さなかつた。この後の點は本質的のものである。實際のところ、それがあらゆる迫害の根源である。宗教上の不寛容といふことよりも、遙かに同信協會に關する法律の方が、最も良い主權者の治世にも不名譽を與へることとなつた暴行の、宿命的原因であつた。

すべて善良微妙な事柄に於てと同樣に、組合のことについても、希臘諸國は、羅馬人以上の優越性を有つてゐた。雅典やロオドの、また多島海中の島々の、希臘人の作つてゐるエラヌ或は、チアズは立派に相互扶助、信用、火災の時の保險、信仰、眞面目な娛樂などの組織であつた。それぞれのエラヌは、碑板に刻した規定や、記錄、共同金庫——それは有志の寄附や醵金によつて充實される——などを有つてゐた。エラニスト或はチアジイトは、一緒に或る種の祭を行つたり、宴會——共處では皆慇懃であつた——に集つたりした。會員が金錢上に困窮した時は、辨濟を義務として金庫から借金をすることができた。婦人もそのエラヌの會員となることができ、別に婦人には婦人の會長（プロエラニストリ）があつた。集會は絕對に秘密であつた。それには嚴重な規定があつて、秩序を維持してゐた。會合は、廻廊の繞らされたものか、或は小建築物で取卷かれてゐる封鎖された庭園の中で催され、その中央には犧牲祭壇が設けられてゐたやうである。尙、個々の組合團體には、昔のギリシヤのデモクラシイが有つてゐた慣習に從つて、一年間の任期で、抽籤による要職者（クレロテス）の一團があつた。さうして、これから基督敎の聖職者（クレルジエ）がその名を採つたものかも知れぬ。會長だけは選擧であつた。これらの官人は、新加入者に對して一種の試驗を行ひ、新加入者が『神聖、敬虔、善良』であることを確かめなければならなかつた。

これらの小さな同信組合には、紀元前二三世紀間、かの中世に幾多の宗派とその派の小分派とを生じた運動と、殆ど同じ運動があつた。ロオドの島だけに、創始者及び改革者の名前を有つたもののある十九からのそれを算したのである。それらのチアズの或物、殊にバツキユスのそれは、高尚な教養を有つて居り、善良なる意志をもてる人々に、多少の慰安を與へようとした。今も尚ギリシヤの世界に、多少の愛、敬虔、宗教的道德が殘つてゐるとしたら、それはかやうな私的宗教の自由によつてである。これらの宗教が公的宗教——それを棄却することは日増に顯著になりつつあつた——に對して、一種の競爭を行つてゐた。

羅馬に於ては、同一種類の組合が、一層の困難に遭遇し、下級階級に於ては、それと劣らぬ好感を受けた。同信組合に關する羅馬の政治原則は、酒神祭に關して共和制時代（紀元前一八六年）に始めて公布された。羅馬人は生來の趣味からして、組合、殊に宗教組合に向ふ傾向が大にあつた。けれども、繼續的のそれらの團體めいたものは、羅馬の特權階級（パトリシヤン）、即ち公權力所有者の喜ばぬところであつた。彼等はその偏狹枯淡な人生觀からして、團體としては、家族と國家とだけしか認めなかつた。最も細密な警戒が講ぜられた。豫め許可を取つて置くことの必要、出席人員の制限、常設的聖壇を所有すること、並びに寄附によつて共同資本を作ることの禁止などがあつた。同樣の注意が、羅馬帝國の歷史中に幾度もあらはれてゐる。法庫にはあらゆる鎭壓のための祭文が藏せられてゐた。しかしながら、それを使用すると否とは官權の任意であつた。禁せられた宗教が、その禁止後年數極めて少きに屢再びあらはれてゐた。加ふるに、外國の移民、とりわけ、シリヤ人の移民がその地盤を革新した。其處には、尤もその甲斐は無かつたが、人々が根絕したくおもつてゐたところの信仰が、養はれつつあつたのである。

表面上かやうに第二義的のものと見えた問題が、最も有力な頭腦を如何なる程度に心配させてゐたかを見て、人々は驚くのである。シイザアやアウグスツスの主なる注意の一は、新しい團體の出來上るのを防止することと、既に確立してゐたものを破壞することとであ

つた。アウグスツス時代のものと見える一勅令が、集會結社の法律上の制限を、明瞭に決定しようと試みてゐる。その制限は非常に狭いものであつた。宗團は專ら葬儀上のもので無ければならぬのである。それらは月に一度集會することとしか許されてゐなかつた。會員は物故した會員の墓のことより他には關係するわけには行かない。如何なる口實に於ても彼等は自己の特權を擴張することはならぬのである。帝國は不可能事に熱中してゐたのである。帝國は、國家に對して誇張的觀念を有つてゐるので、個人と孤立させ、人間の間のあらゆる精神的關聯を破壞し、貧民の正當な欲求、一緒に溫かい感情を獲むがために、片隅に於て互に握手しようとする欲求を無くさうと欲した。古代希臘に於ては、都市が極めて横暴であつた。しかしながら、それを嫌忌せしめる代償として、多くの快樂、光明、名譽を與へたので、そのため何人もそれに不平を言はうとは想はなかつた。人々は都市のために喜んで生命を投げ出した。人々は不平無くその最も不當な氣まぐれにも我慢した。羅馬帝國になると、祖國とするにはあまりに廣かつた。それはすべての者に、物質的の大なる利益を提供した。但し愛すべき何物をも與へなかつた。かやうな生活からは引離すことのできない堪へられない悲哀が、死よりももつと惡いことのやうに思はれた。

さういふ次第で、政治家のあらゆる努力にも拘らず、同信團體が異常な發展を遂げた。それはそれぞれの守護聖者を有つて居り、共同會食をしてゐた中世の同信團體（コンフレリイ）と全く類似のものであつた。大きな家柄は、自己の名前、祖國、傳統を念頭にかけてゐた。けれども、身分の卑い小身者は、唯、宗團（コレジウム）しか有つてゐなかつた。彼等は其處に自分達の樂みを置いてゐた。あらゆる史料は、これらのコレジア、或はケッスが、奴隷、老兵、小身者（テヌイオレス）などから成つてゐるらしいことを教へる。其處では、自由人、解放せられた者、使役人などの間に、平等が行はれてゐた。其處には婦人も多數であつた。幾多の面白く無いこと、時には最も峻嚴な刑罰を課しても、人々はそのコレジアの會員たらうとした。其處には相互扶助もあり、死後までも繼續する連鎖を人々は結ぶのであつた。會員の場所、即ちスコラ・コレジイは、普通テトラスチイル（四方廻廊）があり、守護神の祭壇の傍に宗團規定が貼りつ

けてあり、また食事のために食堂（トリクリニウム）があつた。實に食事はもどかしく待ちかねる程であつた。それは守護神の祭の時とか、創立した或る會員の記念日に供せられた。其處には各人分配物を持參した。順番に會員の一人が、食事の附屬物、卽ち座席、皿、パン、葡萄酒、鰯、湯などを供給した。解放されたばかりの奴隷は、上等の葡萄酒の一壺を朋輩に出さねばならなかつた。霧々の歡喜が宴會を活氣づけた。これらの貧民が節約して得た休息と歡喜との四半時を、何物にも亂されないやうに、宗團に關する一切の用務を論議しないことを特に規定してあつた。すべて、紛擾の行爲や、不愉快な言葉は、罰金をもつて刑とせられた。

表面から見ただけでは、これらの宗團は相互葬儀組合に過ぎなかつた。しかしながら、唯それだけでも、それに精神的性質を附與するには十分であつたことであらう。現代の如く、羅馬時代に於ては、また宗敎の微弱になつたすべての時代に於ても、墓に對する敬虔といふことが、民衆の保存してゐる殆ど唯一のことであつた。恐ろしい共同墓穴に投入されないといふことを想つたり、宗團か葬儀を引受けてくれること、屍體燒棄場に歩いて來る同信者は、二十文の些少の謝金を貰ふことなどを、好んで想ひめぐらしてゐた。殊に、奴隷は、自分達の屍體を主人が塵芥捨場に棄てさせても、自分達のために『夢の葬儀』をしてくれる友人があるだらうと信ずる必要があつた。貧民は、死後、自分の名の刻まれた大理石の板の附いてゐる小さな甕を、埋骨所に獲るために、月々一文を共同箱に入れてゐた。羅馬人にあつては、墓が、サクラ・ゲンチリチア卽ち家の儀式と密接關係があつたから、非常に重要な意義があつた。一緒に葬られた人々は、一種親密な兄弟なり親戚の關係を結ぶのであつた。

それ故、羅馬に於て、基督教が長い間一種の葬儀宗團としてあり、また最初の基督敎の御堂が、殉教者の墓所であつた所以である。基督教が唯それだけに過ぎなかつたら、それはあれ程多くの酷しい所置を煽ることにならなかつたであらう。しかしながら、たしかに、まだ他の事があつたのである。それは共同金庫を所有してゐたことである。それで完全な

一都市たることを自慢にしてゐた。基督教は將來ありと自信してゐたのである。土曜日の夕方、例へばスミルナのサント・ホチニのやうな、土耳古の希臘會堂の圍ひの中に入ると、迫害なり惡意なりを有つてゐる社會の中央に於て、委員制のその宗教の威力に人々は感動するのである。あの建築物（會堂、司祭の居宅、學校、牢獄）の雜然と重なり合つてゐること、その封鎖都市の中を往來してゐる信者、新たに開かれた墓、その上に燈火の燃えてゐること、死體の臭ひ、じめじめした感じ、祈禱の呟き、物乞ひの呼聲などが、生温い空氣をつくつて居り、外國人は折にそれをかなり素氣無いもののやうに想ふが、壇家の信者だちにとつては必ず懷しみのあることに相違無いのである。

一旦特別の許可を得た社會は、羅馬に於てあらゆる私法上の權利を有つてゐた。しかしながら、その社會が一個の金庫を有つて居り、埋葬の事以外に關係するやうになつてからは、その許可は非常に警戒して中々與へられなかつた。宗教或は共同信仰成就の口實は豫定されてあり、さうして、集會に犯罪の性質を與へる事情の中に明かに指示されてあり、またその犯罪は、少くもその集會を催させた個人に對して、大逆罪以外のものでは無かつた。クロヂウスは、同信者が集つた酒場を閉鎖させたり、貧民が安價に湯や粥を得ることのできる小料理店を禁止したりする迄の事をした。トラヤヌス及び最もよい皇帝等も、すべての組合を不信の目をもつて見た。極端にその人々の蔑視されてゐることが、宗教上の集合權を認められた本質的の一條件であつた。しかも、それさへ多大の但書をもつて與へられたのである。羅馬法を作成した法律家は、法律學者としては非常に傑れてゐながら、死刑をもつてまで脅かす事をしたり、あらゆる方法で訴追したり、恐るべき或は幼稚なあらゆる種類の注意をもつて、靈の永遠の要求を制限することをして、如何に人性を知らぬかを示してゐる。佛國の『私法』作成者の如く、彼等は死灰の如き冷かさをもつて人生を想像してゐる。若し人生が、上の命令によつて享樂し、そのパンの片を食し、上長の監視の下に自己の地位相當の樂みを味ふものならば、すべてそれはよく考へられてゐるものかも知れぬ。しかしながら、さういふ間違つた偏狹な方向に身を委ねた社會の罰は、まづ第

一に倦怠（アンニユイ）であり、次に宗教的黨派の猛烈な勝利となる。人間は決してそんな冷めたい空氣を呼吸することを承知しないであらう。人間には相倶に生活し死する小天地の同信社會が必要である。われらの大きい抽象的の社會は、人間に內在する社交性のすべての本能に應ずるだけに十分では無い。何かにその心を休ませ、見出し得るところに慰安を求めさせ、兄弟をつくり、心の連鎖を結ぶが儘にさせて置くべきである。國家の冷めたい手をして、靈の王國に干渉させないやうにすべきである。靈の王國は自由の王國である。羅馬法の悲むべき遺産たる、コレジアに對するわれらの不信が消滅する時になつて、始めて生活、歡喜が世界に再生するであらう。國家を破壞すること無く、國家以外に組合組織（アツソシアシヨン）をつくることが、將來の重要な問題である。組合に關する將來の法律は、近代社會が古代社會の運命を有つことになるか否かを決定するであらう。一例で十分たるべきであらう。即ち羅馬帝國は自己の運命をケツス・イリシチ、イリシタ・コレジア即ち集會を不法とし、宗團を非違とする法律と一緒にしたのである。基督教徒と蠻族とが、この點に於て人間良心の事業を完成して、その法律を破つたのである。その法に執着した帝國はそれと倶に沈沒したのである。

司祭の何物なるかを知らず、神聖な法律をも、啓示書をも有つてゐなかつた俗的世界、娑婆世界の、希臘羅馬の世界は、此處に於て、自己の解決し能はぬ問題に接したのであつた。附言していへば、若しその世界が司祭を有ち、嚴重な神學、强固に組織せられた宗教を有つてゐたら、その世界は俗的國家を作らなかつたであらうし、單に人間的必要と個人の自然關係との上に築かれた社會、即ち合理的社會の觀念を創始しなかつたであらう。ギリシヤ人及び羅馬人の宗教的に低劣なことは、彼等の政治的理知的優越性の結果であつた之に反して、猶太民族の宗教的優越は、その政治的哲學的低級の原因であつた。猶太教と原始基督教は俗的狀態の否定、或は寧ろそれを拘束狀態に置くことを內に含めてゐたのである。回教の如く、兩者とも社會を宗教の上に建てたのである。この方面から人事を取れば、人は大なる世界改宗の業を建て、世界を一端から他端へと奔走し、それを改宗さす使

徒を有つことができる。しかしながら、政治的の制度、一個の民族的獨立、王朝、法典、國民を創めるわけには往かぬ。

第十九章

傳道の將來

基督教の傳道者が改宗せむと企てた世界はかくの如きものであつた。今、かくの如き企てが暴擧で無かつたこと、並びにその成功が不思議のことで無かつたことを見なければならぬやうに想はれる。世界は精神的要求に惱んでゐたのであり、新宗教が立派にその要求に應じてゐたのである。風俗は醇和に赴きつつあつた。人々はもつと純潔な宗教を欲してゐた。人權の觀念、社會改良の思想が、四方から勢力を獲つつあつた。一方に於て、輕信は極度であつた。教育ある者の數はまことに稀少であつた。猶太人の、熱心な使徒、即ちイエスの弟子で、一神論者、即ち人間の耳が曾て聞いたものの中で、最も物柔かな精神的

の說敎にひたつてゐる人達が、かやうな世界に現はれるとしたら、その時は、たしかにその人達は傾聽せられるであらう。彼等の敎育に混じてゐる夢も、彼等の成功の障礙とはならぬであらう。超自然、奇蹟に信仰を置かぬ人々の數は極めて僅少であつた。彼等が身分卑しく貧困なることは却て結構なことである。その當時の人類は、民衆より來る努力によるにあらざれば、救はれるわけに行かぬのである。古代異敎の宗敎は改善不可能であり、羅馬人の國家は、永久に國家の國家たる性質のもので、凝固、乾燥、公平、苛酷なものである。愛無くして亡ぶこの世界に於ては、將來は、民間敬虔の潑剌たる泉源に接觸してゐる者にあるのである。ギリシヤの自由主義、羅馬の古い嚴格は、それには全く無力である。

基督敎の創始は、この見地からすれば、民衆人の曾て成就したものの中で、最も偉大な業績である。疑ひも無く、極めて急速に、羅馬の貴族の男女が敎會に加入した。第一世紀の終末から、フラヴィウス・クレメンス及びフラヴィイ・ドミチルは、基督敎が、殆どケエザルの宮殿中に侵入せんとしてゐたことをわれらに示してゐる。アントニヌス家の初代から、その共同社會の中に富豪があつた。第二世紀の末になると、その中に帝國の最も重要な人物の若干が見出される。しかしながら、當初、すべての者、或は殆どすべての者が身分の卑しい者であつた。最も古い敎會の中には、況んやイエスの周圍のガリラヤに於ては、貴族も有力者も無かつた。ところが、かやうな偉大な創造にあつては、最初の時こそ決定的性質のものである。宗敎の光榮は全然その創始者の有である。事實、宗敎は信仰の事業である。信ずるといふことは通俗の事である。傑作となる所以は、信念を鼓吹し得ることにあるのである。

人々がこれらの不可思議な起源を想像して見ようとする時、通常、現代に模範を求めて事實を想像するものである。ところで、さうすると、人々は重大な錯誤に到達するのである。われらの紀元第一世紀の民衆人は、殊に、ギリシヤ及び東方諸國に於ては、毫も今日あるが如きものとは類似が無かつたのである。當時の敎育は、階級間に今日ほどの强固な障壁を設けてゐなかつた。これら地中海諸人種は、ラチウムの住民――これは世界を征服

した羅馬帝國が被征服民族のものとなつてから、すべての意義を失つたか、或は自身消滅したのである――を除外すれば、實にその諸人諸はわれらより强固では無かつたが、しかしわれらより一層輕快、潑剌、知的、理想主義的であつた。われらのどん底階級の壓迫的の物質主義、あの何となく陰氣な活氣の無い、われらの風土の結果でもあり、中世の宿命的遺産でもあつて、われらの貧民に非常に悲痛な面貌を與へてゐるところのものが、今此處でいふ貧民の缺點では無かつた。甚しく無知であり、非常に輕信家ではあるが、貧民の方が富者とか有力者などより餘計さうであつたといふのでは無かつた。だからして、基督教の確立を、現時われらの國に於て、民衆より發して、有識者の同意を後に獲ること（われらの眼から見れば不可能のことである）になるやうな運動と同じ譯のものであると想像すべきでは無い。基督教の創立者達は民衆人であつた。卽ち彼等が普通の服をつけて居り、質素な生活であり、言葉は拙く、といふよりも、言葉によつては唯自家の思想を鮮明に表現するだけのことを求めてゐたといふ意味などに於て彼等は平民であつた。しかしながら

彼等はケエザル、アウグスツスの偉大な世界から、日に日に數の乏しくなる殘存者であつたところの、極めて少數の人に對してのみ、知能の方で劣つてゐるばかりであつた。アウグスツスの世紀とアントニヌス家時代の世紀との間を結びつけてゐる哲學者の中の選ばれたる人達に比較すると、初期の基督敎徒は薄弱な頭腦の人であつた。羅馬帝國の人民の全體に比較すると、彼等は知識のある人々であつた。時として、人々は彼等を自由思想家として取り扱つた。彼等に對する賤民の叫びは、『神を信ぜぬ者を殺せ』であつた。ところで、それは驚くべきことでは無かつた。世界は迷信的に驚くべき進歩をしてゐた。異邦人の基督教の二大都市アンテオケとエペソとは、超自然的信仰に最も耽つてゐた帝國の二都市であつた。第二第三世紀は、奇蹟と輕信の欲求を狂氣になるまで押し進めてゐた。

　基督教は、公けの世界以外のところで生れたが、しかしながら、明かにそれ以下のところで生れたのでは無い。イエスの弟子達が身分の低い者であつたといふのは、それは外見上のことであり、俗的偏見からである。俗人は堂々たる强きものを愛する。俗人は下級の

者に對して不親切な物の言ひかたをする。俗人の解釋するところでは、名譽は侮辱されないことにある。俗人は弱者と自白する者、すべてを堪へる人、すべての下に自己を置く者、自己の上着を讓る者、打擲に自己の頬をさし出す者を侮蔑する。其處に俗人の誤謬がある。何となれば、俗人の蔑視する弱者は普通彼よりも優れてゐる者であるからである。服從する者（僕婢、勞働者、兵士、海員等）は、命令し、享樂する者に於てよりは偉大である。さうして、それは殆ど定つてゐる。といふのは、命令し、享樂することは、有德になる補助となるどころでは無く、有德の人たらむとする者にとつて一個の障礙であるからである。イエスは、此世界を救ふ忍從と誠實との大なる源泉が、民衆の胸底にあることを、不思議によく了解してゐた。かるが故に、善良であることは、他に於てよりも彼等に於て容易であると判斷して、彼は貧者の幸福を宣言したのである。原始基督教徒は、本質的に貧者であつた。『貧しき者』が彼等の名であつた。基督教徒が二、三世紀に於て富者となつた時にも、精神上のテヌイオオル――小身者――であつた。彼等はコレジア・テヌイオオルムの法律のお蔭で助かつた。基督教徒は、たしかに、低い身分の者やすべての奴隷だけでは無かつた。しかしながら、社會的に基督教徒と等値の者は奴隷であつた。奴隷について言はれることは、やがて基督教徒について言はれるのであつた。双方とも、善意、屈從、あきらめ、溫和などの同一の德をわが名譽とする者である。異教の作家の批判は、この點に於て全く同一である。例外無く、何人も、使役される性格的特長、大問題に對する無頓着、滅入るやうな悔いてゐるやうな風采、時代に對する悲觀的批判、競技、演劇、運動場、浴場などに對する擯斥などを認めてゐる。

一口にいへば、異敎徒は世俗の人であつた。基督教徒は世俗の人では無かつた。彼等は世俗から嫌はれ、世俗を惡しとおもひ、『世俗の塵を受けまい』とする特別の小群であつた。基督教の理想は俗人のそれとは反對であらう。完全な基督教徒は惡罵を喜ぶであらう。彼は貧者、質朴の人、高ぶらうとしない人の美德を有つであらう。しかしながら、彼はその美德の缺點を有つであらう。彼は空虛でも無く、つまらないものでも無いものを、空虛な

もの、つまらぬものと宣言するであらう。彼は宇宙を狹くするであらう。彼は美の敵、美の侮蔑者となるであらう。ミロのヴェヌスが一個の偶像にすぎなくなる體系は、虛僞か、少くも偏頗な體系であらう。何となれば、美は殆ど善と眞とに値するものであるからである。要するに、藝術に於て、かやうな思想をもつてしては衰頽が避くべからざることである。基督敎徒は、いい建築を作つたり、よき彫刻をしたり、いい畫を描いたりすることを重要視しないであらう。彼はあまりに理想主義者である。彼は知ることをも殆ど重要視しない。好奇心は彼にとつて空虛のことと見えるのである。靈の大なる歡樂――それは無限に接する一法である――を下劣な快樂と混同して、彼は享樂を禁ずるであらう。彼はあまりに有德の人である。

別個の法則が、今後この歷史を支配すべきものとして現はれて來る。基督敎の確立は、地中海沿岸に政治生活の無くなつたことと對應してゐる。基督敎はもはや祖國の無くなつた時代に生れて蔓延したものである。敎會の創始者達に何か全然缺けてゐたものがあつたとしたら、それは取りも直さず愛國心である。彼等は世界主義者では無い。何となれば、地球全體が、彼等にとつて追放の地であるからである。彼等は最も絕對的意義に於ての理想主義者である。祖國は靈と肉體との組成物である。靈とは、取りも直さず、記憶、慣習、傳說、不幸、希望、共同の悲歎であり、肉體とは、取りも直さず、土地、人種、言語、山、河、特產物などである。しかるに、初期基督敎徒以上に、それらのすべてから解脫した者は曾て無かつた。彼等は猶太を重要視しない。數年の後に、彼等はガリラヤを忘れた。希臘羅馬の光榮も彼等にとつては無關心のものである。基督敎が最初確立した地方の、シリヤ、クプロ、小亞細亞は、最早その地の自由であつた時代のことを覺えてゐなかつた。希臘と羅馬はまだ民族的の大なる感情を有つてゐた。しかし、羅馬に於ては、愛國心が軍隊と若干の家柄に生きてゐた。希臘に於ては、基督敎は、マムミウスによつて滅ぼされ、シイザアによつて再興されて以來、あらゆる種類の人の集合地であつた都市のコリントに於て結實つたのみであつた。眞の希臘の地は、當時も今日の如く、極めて嫉妬深く、過去の

記憶に甚しく沒頭して居り、新しい說教にはあまり向かなかつた。彼等は常に基督教徒としては偉い者で無かつた。之に反して、快樂と自由の風俗と放任主義の、さうして他から生活と政治とを受取ることに慣れてゐる亞細亞、シリヤの、官能的の、快活、柔弱な、其の地方は矜持と傳統との事に於ては讓るべき何物をも有つてゐなかつた。基督教の最も古い首府の、アンテオケ、エペソ、テッサロニカ、コリント、羅馬は、共同雜居の都市であり、敢ていはば近代のアレキサンドリヤのやうな、其處にはあらゆる人種が群集し、一個の民族を形成する地と人との間の結婚が絕對に破られてしまつてゐる諸都市であつた。

社會問題に與へられた意義は、常に政治的配慮とは逆のものである。愛國心の弱まつた時に社會主義が優勢になる。基督教は社會的宗教的思想の爆發であつた。それはアウグスッスが政爭に結末をつけた時から期待すべきものであつた。回教の如く、世界的宗教の基督教は、根柢に於て民族性の敵であらう。最初はあらゆる地上祖國の否定であり、最早世界に獨立都市も市民も無くなつた時代に生れ、伊太利やギリシャの凝固して強力な舊い共和國ならば、國家に對する致命的毒素として、たしかに除斥したらうとおもはれるやうな宗教をもつて、民族的の多くの教會を組織するやうになるには、幾多の世紀と幾多の分離とを要するであらう。

ところで、其處にこそ新宗教の偉大を成す原因の一があつた。人類は多樣のものであり、變化しゆくものであり、矛盾せる欲求によつて引張られてゐるものである。祖國は偉大なものであり、マラトン、テルモピレエ、ヴァルミイ、及びフルウリュスの英雄等は神聖なものである。しかしながら、祖國がこの下界に於てすべてでは無い。人は佛人であり、獨人であるよりも前に、人間であり、神の子である。人の胸から奪ひ去ることのできない永遠の夢たる、神の王國は、愛國心があまりに排他的なところも有つてゐるのに對して抗議をするものである。自己の最大幸福と自己の精神的改善とを目的としての、人類組織の思想が、基督教的であり、正當である。國家は唯一つのこと、利己心（エゴイスム）を組織することより他には知らぬのであり、知ることができないのである。それは何うでもよいことでは無い。

何となれば利己心は人間の原動力中の最も有力な最も捕捉し得られるものであるからである。しかしながら、それだけでは十分では無い。人間は唯利慾本能だけから出來上つてゐるものだとするこの假定から出發する政治は間違つてゐる。獻身といふことも、偉大な人種の人にあつては、利己心と同樣に生來自然のものである。だから、宗敎も宗敎組合も無くて濟まさせようと希望すべきでは無い。近代社會の進步の度每に、その要求は一層必要のものとなるであらう。

其處に、これらの奇怪な事件の物語が、われらにとつて、尠からず敎訓及び範例に何うしてなるかの所以がある。時代の相違から奇怪に見える若干の特色に停滯すべきでは無い。問題が民衆的信仰である際には、信仰が追ひ求めてゐる理想的目的の大きいことと、信仰を起させた物的事情の小さいこととの間に、常に莫大な不均衡がある。其處からして、宗敎史上では、不愉快な枝葉事と狂暴に類する行爲とが、最も崇高な性質を帶びてゐるすべてのものの中に混入することもあるのである。聖油入を發明した僧侶が、佛蘭西王國創立者の一人であつた。イエスの傳記からゲルゲザの惡魔につかれた者の挿話を取消すことを誰が欲しないであらうか。冷靜な人は、決してアッシジオのフランチェスコ、ジャンヌ・ダルク、隱者ピエル、イグナチウス・デ・ロヨラなどの成した事を成就しない。人間精神の過去に適用された狂といふ文字より以上に、相對的のものは何も無い。若し今日普及してゐる思想を人が追ふものとしたら、幽閉される必要の無い豫言者も無ければ、使徒も無く、聖者も無いであらう。人間の意識は、反省の進んでゐなかつた時代には、極めて不安定なものである。この精神狀態にあつては、善が惡となり、惡が善となり、美が醜に接し、醜が再び美になるのは、感じられない程の通路によつてである。若しそれを認めなければ、過去の方には行はれ得る公平は無い。同一の神聖な呼吸が全史を貫いて居り、立派にそれを統一してゐる。しかしながら、人間の能力が生じ得る結合の多樣なことは無限である。使徒は佛敎の創立者に比すれば、われらとより異るところが尠ない。しかし、彼等は言語の上から、恐らく人種上からも、われらにより接近してゐた。われらの世紀は、昔のそれ

とまるで同じやうに、異常な宗教運動、比例は別として、既に殉教者も多くあり、將來はまだ未定であるが劣らない程多くの熱心を惹起した運動を見てゐる。

自分はモルモン宗のことを言ふのでは無い。それは眞面目に受取ることを躊躇される程或點に於て、甚だ愚劣嫌忌すべき宗派である。けれども、十九世紀の最中に、奇蹟の中に生きて居り、みづから見聞し接したと稱してゐる不可思議を、盲目的信仰をもつて信仰してゐるわれらの人種中の數千人のあるのを見ることは、教訓になることである。既にモルモン宗と科學との一致を證明せむとする好個の文學がある。更に勝れたことには、馬鹿げた詐欺を基礎としてゐる此宗教が、忍耐と自己犧牲の驚異すべきことを成就し得たことである。五百年後には、博士達がその確立の不可思議によつて、その神性を證することになるであらう。波斯のバブ教はまた別個の重要な現象であつた。溫和にして何等我意の無き一種謙遜な敬虔なスピノザの如き人が、殆どわれ知らず、通力者、神的權化の列に擧げられるに至つたのを見た。さうして、この人は熱烈狂信の信徒の多い宗派の長となり、危くイスラム教のそれに比すべき一個の革命を惹起さんばかりになつた。殉教者の幾百千が彼の爲めに樂んで死を迎ふべく赴いた。世界史中に恐らく比類無き一日は、テヘランに於てバブ教徒のために成された大殺戮のそれであつた。實地目撃者からすべてを知り得た一報告者の言によると、『人々はその日テヘランの街路並びに諸雜貨店に於て、住民が永久に忘れる筈は無いとおもはれる光景を見た。會話が今日でもこの事に亙ると、群集の感じた、さうして、數年の時も減じさせなかつた恐怖の混れる感嘆によつてその程度を判斷することができる。刑執行者の間に、全身に肉を開かれ、傷の中に挿された火の燃えてゐる燈心をつけられた子供や婦人の歩いて行くのを見た。人々は犧牲者を綱で引摺り、鞭を當てて歩かせた。子供や婦人は『まことに、われら神より來り、われら神に歸るなり』の一句を歌ひながら進んだ。彼等の聲は群衆の深き沈默の上を響きわたつて上つた。受刑者の一人が倒れた時、さうして、人が笞をあて或は銃をもつて打擲して立たせた時、その五體の上を流れて血が無くなつてゐても、少しでも元氣を殘してゐると、その男は舞踊を始め、熱

心の增加をもつて叫んだ。『まことに、われら神のものなり、われら神に歸らむ。』子供の或者は途中で呼吸を引き取つた。刑執行者はその死骸を父や姉妹の脚下に投げた。親や姉妹はその上を揚々と踏みつけて進み、それに二目と與れなかつた。人々が刑場に達した時、まだ彼等の信仰を抛棄さすために、犧牲者の生命を種にしてゐる。一人の刑執行人が、子を持つ父親に向つて、若しわが言ふところに讓步しなければ、その二人の子を胸の上にのせて頸を斬るぞといふことを想ひついた。それは二人の少年であつた。その長子は十四歲であり、さうして、その子等は自分の血で紅に染まり、肉は燒け爛れてゐたが、冷かに對話を聽いてゐた。父親は、地上に仰臥し、用意は出來たと答へた。すると、長子の方が勢込んで自分の長子權を要求して第一に斬首して貰ひたいと願つた。竟にすべてが完了した。夜は異形な肉の堆積の上に垂れた。首は包んで刑柱にしばりつけられた。郊外の犬は群を成して、その方角に赴いた。[三]』

これは一八五二年に起つたことであつた。コスロエス・ヌシルヴアン時代のマツダク宗派も、同じやうな血汐の沐浴中に根絕させられた。絕對的獻身は、無邪氣な性質の者にとつては享樂中の最も優れたものであり、また一種の要求である。バブ教徒の事件中に、漸く宗派に入つたか入らぬかくらゐの人達が、自分から宗派の者だと訴へ出て、受刑者の中に加へられることを希望するのを見受けた。多くの場合に、殉教といふ餌が、信仰させるに十分なくらゐ、何物かの爲めに苦痛を背めることは、人間にとつて樂しいことである。バブの所刑される道伴れとなつた一人の弟子が、バブと列んでテブリッツの城壁に吊され、死を待ちながら、口にしたのは『師よ、われに滿足したまへるか』の一語だけであつた。

歷史の中で、通俗の常識的計算を超越することを、奇蹟或は空想と看做す人々は、かやうな事實を解釋不可能のこととおもふに相違無い。批判の根本的條件は、人間精神の種々の狀態を理解し得ることである。絕對的信仰は、われらにとつては全く無緣のことである。實證科學以外に於ては、幾分物質的確實性をもつてゐても、すべての意見は、われらから見れば近似的のものに過ぎないものであり、一部の眞理と一部の誤謬とが含まれてゐる。

誤謬の部分はおもひ通りに小さくなるが、藝術、言語、文藝、人間の問題を含んでゐる精神的の事柄に關する時は、それは決してゼロにまで減少することは無い。偏狹、頑固の精神、例へば東洋人の見解はそんなものでは無い。これらの人々の目は、われらの目のやうでは無い。それはどんよりして一個所を見詰めてゐるモザイク人物の琺瑯の目である。彼等は同時に唯一つの物しか見ることができない。この物が彼等に憑き、彼等を獨占する。その時には、彼等は最早信ずる信じないの主人では無い。彼等に於ては、最早反省の奥意の占むべき場所は無いのである。かやうに抱擁された意見のために、人は自殺することがある。宗教に於ての殉教者は、政治に於ける黨人の如くである。極めて聰明な殉教者は多く無い。ヂオクレチアヌス時代の懺悔僧は、教會の平和後には、厄介な喧しい人物たるに相違無かつた。自分が全然正しく、他人が全然誤つてゐると信ずる時、その人は到底十分寛容の人たるわけには往かぬ。

宗教的の大熱火は、事物を見る極めて決定的態度の結果であるから、その爲めに、現代の如く確信の固さの弱まつてゐる世紀にとつては、謎となるのである。われらの世界に於ては、誠實な人は絶えず自己の意見を改訂する。第一には、世界が變化するからである。第二には、鑑賞者もまた變化するからである。われらは同時に種々の事を信ずる。われらは正義と眞理とを愛する。その爲めにわれらは生命をも賭する。しかしながら、正義と眞理とが一宗一黨の所有物であるとは、われらの認めぬところである。われらは善良な佛蘭西人である。しかしながら、われらは獨人英人等が多くの點に於て、われらより優れてゐることを告白する。各人が全然自己の宗團の人であり、自己の人種、自己の政派の人である時代及び國家に於ては、事態がかくの如くでは無い。かるが故に、またあらゆる宗教的大創造は、全般の精神が多少東洋のそれと類似してゐた社會に於て起つたのである。事實、今日迄、絶對的信仰のみが他人に君臨することに成功したのである。千七百年前、自己の信仰のために殺されたリヨンの善良な下婢ブランヂイヌ、約十四世紀前、加特力教に歸依することを可とした蠻族の隊長クロヴイスが、今もつてわれらの掟となつてゐるのである。

近代化したわれらの舊都市を訪ねて、舊時代の信仰の巨大な記念物の脚下に歩を停めぬ者はあるまい。周圍のすべてが革新されてゐる。昔の慣習の一の名殘も無い。伽藍は殘つてゐる。人間の手の屆く高さでは、恐らくやや品格が墮されてゐるが、深くそれは地中に根を卸してゐる。Mole sua stat! その巨大なことがその權利である。それは周圍のすべてを拭ひ去つた洪水にも抵抗した。古人の誰が、嘗て住まつた場所を訪ねて歸つて來ても、自分の家を見出さぬであらう。ひとり、聖堂の頂上に巣をくつた鴉だけが、自分の住所に鐵槌の加へられるのを見なかつた。奇なる配劑である！　かの眞摯な殉教者、かの荒くれ男の改宗者、かの教會を奉納した海賊等が、常にわれらを支配してゐる。われらは基督教徒である。何となれば、さうなることが彼等の氣に入つたからである。政治上で繼續してゐるものは蠻人の建設ばかりである如く、宗教では、感染力のあるのは、自然發生の、敢て曰へば狂信的斷定ばかりである。それといふのは、宗教が全然民衆的産物であるからである。その成功は、その宗教が自己の神性について有つてゐる多少善いところのある證據と關係するものでは無い。その成功は、その宗教が民衆の胸に語るところのものと比例するものである。

然らば宗教は、魔法、妖術、惡魔に關する民間の誤謬の如く、漸次に減少し、消滅する運命にあるものだとの結論が出るであらうか。否、決してさうで無い。宗教は民間の誤謬では無い。それは民衆によつて瞥見され、民衆によつて表現せられた、本能的大眞理である。宗教的感情にある形式を與へることに役立つすべての信條は、不完全であり、さうして、その運命は順次に拋棄される運命である。しかしながら、完璧な人類を考へ出さうとする時、宗教無くしてそれを考へ出す或る人々の空想より以上に、誤つてゐるものは何も無い。その逆をこそいふべきである。劣等人類の支那は、殆ど宗教を有たない。之に反して、知的、道德的、肉體的の力が、地上の人類よりも倍して多い人類によつて住まはれてゐる遊星を假定せよ。その人類は、少くもわれらより二倍宗教的であらう。『少くも』と自分はいふ。何となれば、宗教的能力の增加は、知的能力の增加よりも一層急速の進度を示

して行はれ、單に直接の比例に從つて成されるもので無いといふことが、眞に近いことのやうであるからである。われらの人類より十倍も强い人類を想像せよ。その人類は非常に宗教的であらう。あらゆる物質的懸念及びあらゆる利己心から解放され、完全なる技能と神のやうな微妙な趣味を具へて居り、眞、善、或は美ならざるすべての物の低劣虛無なることを認めてゐるやうな、そんな崇高の度にあつては、人間は只管宗教的であり、不斷の禮拜裡に沒して居り、恍惚へと轉々し、快樂の流の中に生れ、棲息し、死することであらうといふことも首肯されることである。事實、存在の低劣を測定する尺度となる利己心は人が動物から遠ざかるにつれて減少するものである。完全なる存在は最早利己主義者では無いであらう。彼は全く宗教的であらう。故に進歩は宗教の擴大を結果として有することになり、宗教を破壞し、或は宗教を減少することにならぬであらう。

しかしながら、われらが先にセルキヤに達する門からアンテオケを出發する間際のところで、打ち棄てて置いたパウロ、バルナバ、ヨハネ・マルコの三布教者の事に、今立ち戻らねばならぬ時である。自分の第三卷に於て、好き音信の使者の足跡を、地上に、また海上に、穩かなる時、また暴風雨の時、良き日にも惡しき日にも追從することを自分は試みるであらう。自分は急いでその無比の史詩を語り、道々福音の種を蒔いた亞細亞から歐羅巴への果てし無きその道、また幾度も極めて種々なる場合に、彼等が渡つたあの波濤を描き出したい。基督教の大遍歴(オデツセ)が始まらうとしてゐるのである。旣に使徒の舟はその帆を張つた。風は吹いてゐる。唯イエスの言葉をその翼にのせて運ばむと願つてゐるだけのことである。

註　釋

（原書の脚註の數は夥しいものであるが悉く此處にあげるわけに行かぬので、その幾分を譯者が任意抄出したのみである。）

第一章

（一）共觀福音書の作者達は、イエスが生前復活のことを語つたにしても、使徒達がその意を毫も解しなかつたことを認めてゐる。

（二）この點に就いては、第四福音書が最も據所となる。

（三）マタイ傳二八―二以下マカ傳十六―五以下ルカ傳二十四―四以下

（四）この朝の場面に關する六七の物語（マカ傳にも二三あり、パウロにもあり、ヘブライ福音書にもある）は全く不一致である。

（五）極めて嚴肅なカルヴアン派に屬するロッテルダム前面の一小島では、臨終の際イエスが枕許に來てくれるものと百姓達は信じてゐるのみならず、事實多くの百姓等はイエスの姿を見るとのことである。

（六）ヨハネ傳二十二章二十九節

（七）ヨハネのみが獨自の幻を有たぬことは注意すべきことである。

第二章

（一）マタイ傳二十八章七節マカ傳十六章七節

（二）使徒行傳一章十四節によれば昇天の時エルサレムにゐたことになつてゐるが、それはルカ傳の作者の意圖に從はむためで、復活後彼女等がガリラヤに旅をしたこと無しとしようとするからのことである。マタイ及びヨハネ兩傳と異るところである。

（三）コリント前書十五章五節以下。

（四）ヨハネ傳二十一章一節以下

（五）ヨハネ傳二十一章九—十四節、ルカ傳二十四章四一—四三節比較。ヨハネは漁獵と食事とを一場面にして居り、ルカはさうで無い。錯覺は生ずる時別々のものである。話がそれに聯絡をつけるものである。

（六）ヨハネ傳二十一章十五節以下

（七）コリント前書十五章六節

（八）この期間が果してどれくらゐであつたか諸說一も殆ど同じからず。

（九）その事はサレツトやルウルドの奇蹟についても見られた。奇蹟傳說の出來る最も普通の一樣式

は次の如きものである。ある聖人物が病氣を治すと噂せられる。すると、人が病人をその人の許に伴れて來る。病人は感動して輕快する。すると、翌日には最早その噂が十里四方にも擴がつて、奇蹟があつたといふことになる。五六日經つてから病人は死んで、葬むられることになるが、その葬式の頃には病氣が治つたといふ噂の方は四十里四方にも廣まつてゐて、病人の死んだといふ話の方は一方傳へられないのである。

（一〇）この種の一現象で最も著明なものが每年エルサレムに起るのである。ギリシヤ正教徒の言によると、復活祭の翌土曜日に聖墓地に自然と點る光が、その光を受けて額にあてても燒けない者の罪を消す功德があるとのことである。多くの順禮者はそれを實驗して見て、その火が燒けただらすことを十分知つてゐる。それにも拘らず、正教會の信仰に反對の說を唱へる者は一人も無い。若しさういへば、自分に信仰の無いこと、奇蹟に値ひしない人間であることを表明することになるからであらう。

（一一）一八五五年五月二日のグルノオブル裁判所の判決を見よ。

（一二）ベタニヤのマリヤのことである。

第三章

（一）マタイは全くガリラヤ說であり、ルカ、マルコはエルサレム說であり、パウロはずつと遠方にも起つたとしてゐる。
（二）使徒行傳八章一節、ガラテヤ前書一章十七節―十九節、二章一節以下
（三）尤もこの考は第四福音書に敷衍してあるのみであるが、マタイ三章―十一節、マルコ一章八節、ルカ三章十六節其他にもほのめかされてゐる。
（四）ルカ最後の章及び行傳第一章、

第四章

（一）使徒行傳一章十五節、『五百の兄弟』中の最大部分は必ずガリラヤに殘留してゐたらう。行傳二章四十一節の言葉はたしかに誇張であるか豫測であらう。
（二）ヨセフスの『猶太戰爭記』を讀め。
（三）ヨハネ傳二十章二十二節
（四）『イザヤの昇天』は第二世紀當初に書かれたものらしい。
（五）火の舌といふ言葉は單にヘブライ語で焰といふ意味である。
（六）コリント前書十二章三節、十六章二十二節、ロマ書八章十五節。

第五章

（一）新約聖書ほど「よろこび」といふ言葉の多く反覆されてゐるものは無い。
（二）行傳五章一節―十一節。
（三）ルカ傳二十二章十九節、コリント前書十一章二十四節以下
（四）マタイ二十八章一節以下によれば、番人が石を取り除いた天使の降下を見てゐた筈である。この物語では困つて、婦人も其處にゐたこととしたがつてゐるが明かには言つてゐない。要するに番人と婦人とは復活するイエスを見たので無く、天使を見たことになつてゐるやうである。かやうな說きかたは話として最も後のものである。
（五）コリント前書十六章二十二節、この二語はシリヤカルデヤ語である。
（六）病氣は一般に惡魔の所爲と考へられてゐた。
（七）行傳八章十二、十六章、十章四十八節。
（八）マタイ傳三章十一節。
（九）マタイ傳二十八章十九節。
（一〇）行傳五章十六節、十九章十二―十六節。

（一一）ピリピ書一章二十三節、これはやや意味の異つたところがあるやうであるが、テサロニケ前書四章十四―十七節を比較せよ。

（一二）初世紀より分離せる宗教團體中に於てこの歌の同一なることは、その歌の非常に古いものであることを證明してゐる。

第六章

（一）使徒行傳二章三十四節以下其他參照。

（二）コリント前書一章二十二節、二章四、五節、コリント後書十二章十二節、テサロニケ前書一章五節、同後書二章九節、ガラテヤ書三章五節、ロマ書十五章十八、十九節。

（三）モルモン信者にとつては奇蹟は日常のことである。ジュウル・レミ著モルモン地方旅行記前篇一四〇、一九二、二五九―二六〇、後篇五三頁以下參照。

（四）ルナンの『ギリシヤ語發音の數點に關してセミチック語よりする解明』（一八四九、巴里）參照。シリヤのギリシヤ碑銘語は極めて拙なるものである。

（五）ホラチウス『諷刺詩』一ノ五、一〇五。

第七章

（一）使徒行傳二章四十五節、四章三十四、三十七節、五章一節。

（二）使徒行傳二十一章八節。

（三）ロマ書十六章一節、コリント前書九章五節其他。

（四）カログリイの服裝は今日でも昔と略同じであり、オリエントの修道女の典型は寡婦であるが、拉丁のそれは處女である。

（五）コリント前書十二章全部。

（六）詩篇一三三。

第八章

（一）イエスとパリサイ人との相互的反目はヨルダンの彼岸に基督教徒を逃亡せしめるに至つた事變の結果、恐らく共觀福音書家によつて誇張されたものであらう。主の兄弟ヤコブが殆んどパリサイ人であつたことは否定することができない。

（二）多分奴隷として羅馬に伴れて行かれ、後に自由人となつた猶太人の子孫であらう。

（三）古い律法では神自身が姿をあらはすもので無く一種の仲介者をもってあらはれるものと想像してゐた。

（四）マッテンのヒストリイ・オブ・ジゥイッシュ　コイネェジ一三四頁以下參照

第九章

（一）今日ナブルウズからヤッフアに至る途上にあるジットのこと。

（二）基督教徒の作家によってこの人物シモンを調査すると、その實在如何を疑はしめる程のものである。けれども、使徒行傳すら記載するところをみると實在人物であったと見るべきであらう。

（三）イザヤ五十三章七節。

（四）ゲベル・バルカル附近の現時メラキといふ地。

（五）この猶太人の子孫は今もファラシャンの名にて殘ってゐる。血統上のイスラエル人では無い。

第十章

（一）この年代は使徒行傳九、十一、十二章とガラテヤ書一章十八節、二章一節其他と比較して出したものである。

（二）紀元六十一年頃に書いたピレモン書の中で「老人」と自稱して居り（五章九節）、行傳七章五十七節は紀元三十七年頃の事について靑年としてゐる。

（三）Jésus を Jason とし、Joseph を Hégésippe Eliacim を Alcime とするなどと同樣である。聖ジェロオムがセルギウス・パウルスからパウロの名が出たものと想像してゐるが、これは首肯しがたきことである。この人物との關係があってから始めてパウロといふ名になってゐるけれども、それは唯パウロの對異邦人傳道者としての生活がこの人を改宗させることから始まってゐるだけのことでそのために改名したのではあるまい。

（四）とりわけピレモン書を見よ。

（五）中世の傳統が奇蹟の場所を此處に定めたのである。

（六）この平野は海拔千七百メートル以上である。

（七）エルサレムからダマス迄は十分に一週間の道程である。

（八）パウロの同伴者が彼同樣に見聞したとするのは傳說であって、物語によると明かに矛盾してゐる。行傳九章七節、二十二章九節、二十六章十三節を比較せよ。落馬したとの臆說は物語全體から排せられる。

第十一章

（一）今日のルッド。

（二）ヤッファ。

（三）行傳九章二十七節、パウロのエルサレム滯在の半個月間バルナバの立派な行爲があつたと斷ずるには、使徒行傳のこの個所全部が十分史的價値を有つてゐるとはいへない。しかし、その調子から推して否定することもできない。

（四）紀元五十一年にキリキヤには教會があつた。行傳十五章二十三節、四十一節。

第十二章

（一）羅馬が第一、第二はアレキサンドリヤである。

（二）この方面のアンタキエの地域の現在の限界となつてゐるアクデニス湖は古代には無かつたやうである。

（三）マロニイトの典型はアンタキエ、スエイヂエ、ベイラン全地に著しく見出される。

第十三章

（一）使徒行傳十一章二十二節以下。

（二）同十一章二十二節—二十四節。

（三）コリント後書を書いた年より十四年前にその幻を見たとパウロが言つてゐる。後書を書いたのは紀元五十七年頃であるが、しかしそれがタルソであつたとするも不可能では無い。

（四）イザヤ昇天記六章十五節、七章三節以下を比較せよ。

（五）使徒行傳ではパウロもこの旅行をしてゐることになつてゐるが、パウロは最初の二週間滯在の時と割禮問題での旅行との間にエルサレムに赴いたことが無いと言つてゐる。

第十四章

（一）この暴動の歷史を詳細に述べてゐるヨセフスがその中に全く基督教徒を加へてゐない。

（二）今日王の墓といふ名の下に知られてゐる記念物のやうである。

第十五章

（一）ユダ及びトウダスの二運動と基督敎との類推は使徒行傳の作者自身によつて成されてゐる。トウダスは邦譯聖書にはチウダとしてある。

（二）コロサイ書一章十五節以下を見よ。

（三）最も有名なものはドシテのそれである。

（四）敎父達がシモンの爲めの碑銘とおもつたシモニ・デオ・サンクトはセモニ・デオ・サンコのことで、サビイスの神セモ・サンケスの拉丁碑銘であつた。

（五）使徒行傳ではシモンがまだ敵として扱はれてはゐない。唯その下劣感情を批難し、彼もそれを悔いたやうに信ぜしめるやうにしてある（八章二十四節）。恐らくこの行の書かれた頃シモン尙生存中で基督敎との關係まだ悪化してゐなかつたと見える。

（六）階級制と敎會の權力を尊重するのが好きであつた行傳の作者がわざとかくしたもので、パウロはさういふことを全く關知せず、自己がアンテオケの敎會からも、エルサレムの敎會からも派遣されたものとはおもつてゐなかつたらう。

第十六章

（一）使徒行傳十二章。前章參照。

（二）ホラチウス諷刺詩參照。

（三）ジヴエナアル諷刺詩三ノ六五以下。

（四）自分の第一回の旅行の時美しいとおもつた者が四五年後には醜悪平凡不快な者となつてゐた。

（五）ホオランに生れた。

（六）このシルス人といふ言葉は一般に近東人といふ意味。

（七）今日でも基督敎徒シリヤ人の風である。

（八）Si interissent, vile dam num; タキツスの呪ひの言葉。

第十七章

（一）モムゼンの研究を見よ。

（二）パウロの酷評も同様に解釋すべきである。パウロは羅馬の上流社會を知らなかつたのであるのみならず、説敎者の罵詈は文字通りに解すべきものでは無い。

（三）碑銘にその例無數である。

（四）Immensa romanae pacis majestas — Plinius.

（五）初期基督敎徒は羅馬の官憲に對して十分敬意を拂つてゐた。ロマ書十三章一節以下其他。

（六） Caritas Generis humani — Cicero,

（七） ロオマ時代のコリントは舊市區上に作られた外國植民地であつた。

（八） 小亞細亞の古代劇場の舊跡は今日でも賣淫の巣窟である。

（九） アリストテレス『政治論』參照。

（一〇） 初世紀に重要な基督教の地であつたギリシヤ中の唯一市のコリントはこの時代には最早ギリシヤ都市では無かつた。

第十九章

第十八章

（一） ポンポニア・グレチナの事實は有名であるが、彼女が信者であつたか否か確實で無い。

（二） ゴビノオ伯のバブ教起源史を見よ。

（三） ルナン自身の確實なる者より聞いた別個の談によれば、或信者は大砲の口に繋りつけられ、大砲には長い雷管を仕掛け、徐々に火の燃え移るやうにし、若し信者がバブ教を棄てるといへばその口火を消してやるといふのであつたが、信者は早く火が燃えつくやう請ひ、早く此世を解脱せしめられるやうにして欲しいと願つたとのことである。

世界名著叢書刊行の趣旨

日本は今や完全なる意味に於て世界の日本となつた。其時々の浮薄なる流行とヂャアナリズムとに唆かされて、或は單なる好奇心から、何等の選擇もなく標準もなく、漫然舶載の書を追ふて走るが如きは、新人としての自己教養に十分眞摯なる者の態度とは云はれないであらう。此點に第一の注意を拂はれたる本叢書は、世界の、特に歐羅巴の燦爛たる文化に對して、本質的の根柢をなし來つたもの、又それぞれの方面に於て劃時代的の反響を實證し、永久的の眞價を決定されてゐるものに嚴密なる範圍を限り、各原著の根本精神と共鳴し默契するところある翻譯者を、普く現代文壇思想界の權威者たる人々の間に求めた。しかも意譯を口實として任意の增減を敢てし、辭柄を直譯にかりて生硬苦澁の文字を羅列するが如き在來の譯書に通弊をなしてゐたところのものは、その中のいづれの部分にも、いづれの個所にも見出されないであらう。刊行者は幸にして此の如き劃時代的の、又永久的の意義を有する文化事業に參加し得たことの、過分の光榮を思ふものである。

株式會社 東京堂書店

大正十五年[illegible]月[illegible]日印刷
大正十五年[illegible]月[illegible]日發行

使徒奧附
定價二圓八十錢

世界名著叢書

譯者　廣瀬哲士

發行者　東京市神田區表神保町三番地　株式會社東京堂代表者　大野孫平

印刷者　東京市牛込區柳町二十一番地　田中末吉

發行所　東京市神田區表神保町三番地　株式會社　東京堂書店
振替東京二七〇番

〔[illegible]社印刷所〕

「世界名著叢書」について

本書は世界の特に歐羅巴の燦爛たる文化に對して、本質的の根柢をなし來つたもの、又それぞれの方面に於て劃時代的の反響を實證し、永久的の眞價を決定されてゐるものに嚴密なる範圍を限り各原著の根本精神と共鳴し默契するところある飜譯者を、普く現代文壇、思想界の權威者たる人々の間に求めた。意譯を口實にして任意の增減を敢てし、辭柄を直譯にかりて生硬苦澁の文字を羅列するが如き在來の譯書に通弊をなしてゐたところのものは、その中のいづれの部分にもいづれの個所にも見出されないであらうことを信ずる。其時々の浮薄なヂアナリズムに唆かされ、漫然舶載の書を追ふて走るが如き、自己教養に眞摯な態度とは云へない。敢て本叢書を新人に薦むる所以である。

(1) オディッシイ　ホオマア著　生田長江譯（品切）
(2) 希臘悲劇六曲　中村吉藏譯（品切）
(3) ワレンシュタイン　シルレル著　新關良三譯（品切）
(4) 耶蘇　ルナン著　廣瀨哲士譯　價二、八〇　稅一八
(5) 皇帝とガラリヤ人　イプセン著　島村民藏譯　價二、八〇　稅一八
(6) 結婚の契約　バルザック著　新城和一譯　價二、八〇　稅一八
(7) トルストイとドストエーフスキイ　メレヂユコーフスキイ　昇曙夢譯　價二、八〇　稅一八
(8) 使徒　ルナン著　廣瀨哲士譯　價二、八〇　稅一八

◇ 世界名著叢書 ◇

ルナン著　廣瀨哲士譯

耶蘇

聖書に次く
世界的名著
の完全なる
邦譯!!

四六判函入上製
定價二圓八十錢
送料十八錢

「ルナンの『耶蘇』以上には最早耶蘇傳を書く餘地がない」とは多くの批評家の一致した言葉である。耶蘇の後に耶蘇なきが如く、誠にルナン以後彼以上の耶蘇傳を著したものはない。その流麗典雅、誠に耶蘇を語るにふさはしきルナンの名文は、佛文學の權威たる譯者の明快なる譯筆を得て、始めて原著直接の完全譯を見るに至つた。今日の混沌たる思想界の迷路に惱める者、來つて永遠に清新にして生命ある思想を、此の偉大なる人格に酌め!

◇世界名著叢書◇

イプセン著　島村民藏譯

■皇帝とガラリヤ人

四六判函入上製
定價二圓八十錢
送料十八錢

この作は有名な羅馬皇帝ジユリヤナス・アポスタタの波瀾に富んだ史蹟に基づいて書いたもので、希臘思想とキリスト教の二大思潮の間に立つた皇帝の苦惱、崇高、悲しき滑稽に滿ちた心的葛藤を變轉極りなき世界の大舞臺の上に於て活現した二部十幕の史劇イプセン不朽の長篇である。

「ファウスト」に比せらるるイプセン畢生の傑作にして
「第三帝國」の理想を描きたる一大長篇史劇也。

◇世界名著叢書◇

バルザック著　新城和一譯

■結婚の契約

（附）ウウジエニイ・グランデエ

四六判六百頁
定價二圓八十錢
送料十八錢

本書の物語は、パリイ及びボルドオの上流社會で、樂しい結婚にも關らずその影に男女兩性の辛辣な爭鬪が續けられる寫實と解剖の極をつくした逸品である。附錄の『ウウジエニイ・グランデエ』は、純潔百合の如き少女が貪慾飽くことない父親に虐げられ、戀人に裏切られ乍らも信仰の生活を辿る、崇高の魂と醜惡の權化の戰ひを描いた傑作で、前者が都會の腐敗を、後者が田園の淸淨を描いた代表作として此一書により巨人バルザツクを完全に味讀することが出來る。

ウウジエニイの純潔崇高なる熱情を見よ!!
「美しき魂」は眞に此一卷の小說に溢れたり。

◇世界名著叢書◇

昇曙夢譯　メレジュコーフスキイ著

■トルストイとドストエーフスキイ（その生活と藝術）

四六判六百頁上製・定價三圓・送料十八錢

本書はメレジュコーフスキイが畢生の努力を傾倒して近代ロシヤ文學の二大巨人の生活と藝術とを最も廣く且つ深刻に批判解剖したもので、啻にロシヤ批評文學の誇りであるばかりでなく、世界に二つと無い名著である。その透徹した藝術批評及人生批評もさることながら、著者の狙つてゐる所は寧ろ人文史上に於ける二大巨人の生活と藝術とを通して、ロシヤ、ヨーロッパ及全人類の精神文化の根柢に横はれる世界的祕密卽ち東方精神と西歐精神の矛盾、戰鬪の精神と慈愛の精神との葛藤、神人と人神との戰鬪を、哲學的宗教的乃至文化的に解決するにある。されば豫言的暗示に富んでゐる點に於て現代人の默示錄とも言はれてゐる。是こそ眞に人間として生きんとする者の必ず精讀すべき新經典であり、又事實此書を讀んでその人生觀上乃至藝術觀上一大變化を體驗しない者は無いと斷言することが出來る。

ベルグソン著　慶大教授 廣瀨哲士譯

■笑の哲學

四六判函入上製　定價二圓　送料十二錢

現代哲學界の權威アンリ、ベルグソンの喜劇と笑に就ての研究である。生命の機械化が滑稽、笑の原因であることを、幾多の例を索いて說き、進んで喜劇と悲劇の本質的差別について透徹した哲學を述べてゐる。讀者は言葉の可笑味シチュエエションの可笑味の明快なる解剖から引きづられ更にモリエエルの性格喜劇、ドンキホーテとハムレットの差違を說く柔軟自在の文章に面白味を感じながら、ベルグソンの頭の好さに驚嘆されるであらう。しかも彼の藝術の本質を說き、笑が社會生活に及ぼす意義を論ずや誠にアリストテーレス以來の哲學者の哲學的思索に對して、常に其掌をくぐり拔け、遁げ廻り、生意氣にも挑戰的態度を取つた道化役者「笑」が見事に帽子をぬいで我々の前にひざまづいたのに氣がつくであらう。譯文明快、原文の妙を寫し得て遺憾がない。

エト6D56

文藝・哲學書類

文學博士 金子筑水著
歐洲思想大觀
▲ギリシャ思想、基督教、ルネサンス、唯理思想、ロマンチシズム、最近代思潮、戰後の思想界に分つて歐洲思想の變遷推移を簡潔明快に說きたる名著。
定價二圓八十錢 送料十二錢

文學博士 金子筑水著
藝術の本質
▲人生に於ける藝術の價値、一般文化の上に於ける藝術の位置の問題を理想主義の立脚地から考察して平易に講述し其本質を明らかにせられてゐる。
定價二圓八十錢 送料十二錢

文學博士 金子筑水著
現代哲學概論
▲本書は複雜多岐を極めたる現代の哲學を或は橫斷し或は縱斷して全體の潮流を平易に明確に、系統組織的に講述し現代哲學の眞生命に觸れしむ。
定價二圓八十錢 送料十二錢

本間久雄著
生活の藝術化
▲この世に生を享けた以上生きることの意義を自覺し生きることの悅びを感じて日毎の生活を營まふとする生活の藝術化の思想を提唱したる名著である。
定價一圓八十錢 送料十二錢

四高教授 高橋禎二譯述
文學原論
▲現マールブルヒ大學教授エルスタア博士の名著に基づいて文學の本質と文藝批評の原理を、或は美學或は哲學の上に据ゑて縱橫に說きたるもの。
定價二圓八十錢 送料十二錢

キュルペ著 藤井昭譯
美學原論
▲ヴントの高弟キュルペが實驗心理學的立場から說いた美學の一體系で從つて美的狀態の心理學的分析や、美の異態等に詳しい。よく纏つた手頃の書。
定價二圓五十錢 送料十二錢

終